
ジャポニカ自由帳

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャポニカ自由帳

【Nコード】

N9651Z

【作者名】

青山 黒美

【あらすじ】

自暴自棄に近い自由帳

無題

200個のダイヤを親指で打った。時間にして約3分程度だろうか。
几帳面に、白黒十個ずつだ。こういうところが、いけない。なので
黒のダイヤを一つを消した。

199個のダイヤ。

スタート。

狂った果実を

果実を一口かじる。味はしない。皮の色は黒、実は白い。無臭。

食感 は 林檎 という より 梨 の よう だ。水分を多く含んでいる。

「レティカ？」

「マウル、クロウニエ……」

「パティス、アラロウネ、シュティ？ パスウロアンネ？」

「ロツ……。カミュウル…ネッツァ」

「パティウロ！！ カ、カティミュ、サバアアサア！！」

女は急に怒りだして男を罵倒しだした。部屋の壁には白と黒のタイルが交互に規則正しく張られていて、天井は薄暗い赤だった。そこからシャンデリアが垂れ下がり、ガラスの細かい装飾に時折光がちらつく。

男が悩ましげに手の平でもって顔を擦りつけていると、女は着ている赤いドレスを強引に引っ張る様にして部屋を出て行った。

「パティウロ……」

ベッドに横になった男がそう呟くと、天井からシャンデリアが落ちてきた。

男はシャンデリアに殺され、女はドアに挟まれている。

狂った果実が床に転がる。部屋の中でクラシックの曲が流れ始め

た。

無作為で出鱈目な曲。

獅子舞い

真夜中、寺の本堂にて、獅子が舞う姿を見た。あの力チ力チと歯を鳴らす音は私の耳へと容赦なく入り込み、胸の奥底の不道德なる映像を呼び起こした。

我が和尚の不埒なる行い。

私は獅子に近づいた。すると獅子は尚更に荒々しく踊り、威嚇するように歯を強く鳴らすのだった。これは夢に違いないと思いつつも、広い本堂でただ踊り狂う獅子の姿はそれでも鮮やかに写った。それは和尚の不埒なる映像と同等、私の心に焼き付いて放れずにいる。

あの狂乱たる舞いは、私が和尚に向ける怒りの表れなのだろう。そして、あの音は……。許せと響くのだった。

『三島文学を破壊、そして大宰論の否定へ』

よい年を願う。

気分崩壊元旦コンビ二餅の系

まさか元旦始まって数分で笑いが起こるなんて奇跡に近い。

しかも相手は坊さんだ。

それは、テレビジョン。『ゆく年くる年』を半ば死んだ様に寝つころがって見ている時に、事件は起きた。

除夜の鐘が画面に映し出され、今年の百八ツを打つという大任を任された坊さんが今だと紐を引っ張る。

一撃が鳴った。

ゴン。

二発目。

コッソソ。

俺は二発目の音がやけに小さいなと思った。この時はまだ、これが奇跡の三発目への伏線だとは誰も考えはしなかっただろう。

三発目を鳴らすために紐を引っ張る坊さん。

今考えると、この時の坊さんの気持ちに同情する。坊さんだって男だ。二発目の音が小さいばかりに大勢から馬鹿にされたんじゃない情けない。

次こそは。と、なるのが人である。

しかし結果、坊さんの三発目は煩惱を打ち消すことなく、足元をおぼつかせながらズルズルと紐に引っ張られ……警備員に支えられて終わった。

この坊さんは我が身を犠牲にして人々に説法を説いたのだ。

坊さんだっ て緊張する。失敗だっ て。
するさ、と。

今朝、コンビニに行くと、この間の女性従業員がいた。
恋とは何か？

ブログと文学文豪卒倒

おそらく、昔の文豪がネットなるものを覗きこんだのなら。

卒倒するだろう。

それだけ文字で溢れかえっているのが、ネットというものだ。

果たして文学は衰退したのだろうか？

結論、してはいない。寧ろ文章を書く技量は昭和の若者と今の若者を比べれば、後者の圧倒的勝利に終わる。

それは何故か？

ブログやメール文化によるものである。

要は単純に文章を書く頻度が日常生活の領域にまで来たのだ。これは進化とは言えない。しかし、進化による退化は必然的に起こる。

また次回にしよう。

恋とは何か？

自己ワードセレービー

抱擁。

暖かなる部屋の中で、僕は青に逢う。

深海の音を聴きながらカーテンを見つめる。静かな優しさに埋もれたいと願って。

青は僕に言葉を与えてくれたよ。

静かなる安らぎは君の傍らにいつまでも。

柔らかな呼吸をする。淡く小さな声を掛けてくれた君を思い、緩やかに届く微笑みを愛してもいいよ。

「だいじょうぶだから。また、笑顔を愛するの。約束しよう」

静かな呼吸。

柔らかな。

優しさからの、
息を。

大切にね。

作成日
2011年
12月
25日

自己ワードセレーブー（後書き）

これがわかってしまう人とは仲良くできると思う。

無題

朝、目が覚めるとブンブンブン、と音がした。凄まじい音で空気を揺らしている感じだった。

そして自分の視界に驚いた。万華鏡の様に部屋が分裂して映る。手で目を擦った。自分の手が枝の様に細く、黒かった。

考えても解らない。何が起こったのだろうか？ 辺りを見渡すと誰かの部屋のらしい。いくつも同じ部屋が映り込んで頭がクラクラする。

「ん……」

と、声がした。

ベッドに誰か寝ている。近づこうと意識したら地面から浮いてしまった。自分は寝ている人の傍に着陸する。

またも驚いた。

寝ているのはパン屋の娘ではないか。恋をした人だった。

「キャ！」

何故か相手は驚きティッシュの箱でもって……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9651z/>

ジャポニカ自由帳

2012年1月8日22時49分発行